

齋藤憲先生のご退職にあたって

廣石 忠司
経営学部教授

退職記念号における献辞は、一番交流が長かった教員がしたためるのが本来であろう。昨年の記念号では池本先生に対して宇佐美准教授が、加藤先生に対して福原准教授が「教師と教え子」という関係から実に濃密な交流を描いておられる。ところが、齋藤憲先生（以下、先生と略させていただく）は本学に着任されて16年のため、教え子は本学教員の中にはいない。また、ご専門の経営史の学会である経営史学会の会員もいない、ということで筆者のような者が先生に対してお別れの言葉を述べることに違和感を持たれる向きもあろうが、ご容赦願いたい。

先生との交流については後述することとし、まず学問的業績について述べたい。先生のご業績として最初に挙げるべきことは、1987年に第30回日経・経済図書文化賞を受賞された「新興コンツェルン理研の研究」（時潮社）をはじめとする理化学研究所・理研コンツェルンに関するご研究であろう。それまで研究者の注目を集めずにいた、新興企業集団（日産、森、理研など）のうち、もっとも地味と思われる理研を研究対象とし、第三代所長である大河内正敏の業績を発掘、明らかにしたことは経営史を超えた企業者史ともいべき分野のさきがけともいえる金字塔といえる。

この研究の中で、先生は日本企業の工業化における大河内の役割を高く評価し、また研究所の中で自由に研究員に研究させたという土壌づくりの重要性を指摘しておられる。予算や部門の枠を壊し、自由な発想と「とにかくいいと思うことはやらせる」という理研の文化が戦後湯川秀樹、朝永振一郎というノーベル賞受賞者を生み出した（朝永は理研を「科学者の自由な楽園」と称した）ものともいえ、今でいう「イノベーション」を実践したという事実を明らかにした業績は大きい。

なお余談であるが、理研において戦争末期には原爆開発を陸軍の命令で実施していたことや大河内が「造兵学（兵器を造る学問）」の専攻であったことをとらえ、理研は戦争加担者であるといった見方もある。しかし私見では、同時に物理学者の武谷三男が治安維持法で検挙・投獄されていた時代にも武谷を研究員として雇用し、投獄中にも研究をさせていた（読売新聞社編『昭和史の天皇－原爆投下－』に記述あり）ことも指摘しておきたい。

また第二には浅野セメントなどの創業者である浅野総一郎に関する研究を指摘しておこう。浅野財閥も注目されていた企業集団とはいえなかった。しかし日本鋼管、JFE エンジニアリング、ジャ

パンマリンユナイテッドとつながる企業（浅野造船所の後身）、浅野セメントを改称した日本セメントの後身である太平洋セメントなどの基礎を作った企業集団であった。また浅野は自力で京浜工業地帯となる場所の埋め立てを行い、京浜工業地帯を作った人物でもある（ちなみに横浜市神奈川区にある浅野学園も彼の手によるものであるし、JR 鶴見線の駅名にも「浅野」がある）。この隅田川の水に砂糖を溶かした砂糖水を 1 杯 1 銭で売っていた男が実業家になるまでを追いかけた先生の努力は、探偵や刑事ものにもつながる知的探求心の賜物ともいえ、今日では浅野総一郎の研究といえ先生の名前があたり、他者の追隨を許さないものがある。

こうしてみると、先生のご研究は「ナンバーワン」というより「オンリーワン」というものであることに気づく。誰も手を付けていないものを手掛け、しかもその段階で収集すべき資料を渉獵しつつあるので、続く者が出てこない（後進は先生の研究をしのぐオリジナリティを出すことができない！）ということなのであろう。

さて、専修大学内の学内行政に目を転じると、ここでも先生の追隨を許さないオリジナリティあふれた業績がある。専修大学の OB 経営者を組織化した「企業家クラブ」の設立である。本来、専修大学の経営者にはどのような人たちがいるか、ということは一種のデータベースとなっていなければならないところであるが、どのような人々がいるか、その人たちの大学に対するニーズがあるのか、といったことを経営研究所のプロジェクトとして調査し、その結果として OB 経営者の組織化を先生が行ったのである。

ちょうどそのとき、筆者が経営研究所長だったため、先生と共に全国各地の OB 経営者に会いに行ったこと、特に熊本城は震災前だったこともあり、いい思い出になっている。なお大学院経営学研究科長として筆者は先生の後任であり、研究科のマネジメントにつき種々ご教示を賜ったことも付記しておきたい。

この「企業家クラブ」、メンバーに大学の授業にもお越しいただいている他、定期的に OB 相互の交流をしていると聞いており、「オール専修」という言葉の一つの具現化ということができる。

最後に私的な交流を申し上げることをお許しいただきたい。先生がお体をいたわるようになる前は、先生にかなりアルコールや食べ歩きにおつきあいいただいた。そのことがお体にさわったのではないかと若干気にならないでもないが、そうではなかったとしておこう。そうした際、大学の帰りのみならず、奥様、家内とご一緒に 4 名で食事をしたこともあった。ここの何はうまい、ここはダメ、などと承ると、先生お住まいの国立市ではすべての飲食店を制覇されたのではないかと思います。そうしただけでなく、先生のお話はくだけた話かと思えば、一転して含蓄に富む内容であるなど、非常に楽しいお酒と食事であった。

先生のご趣味…についてはステレオなどの音響機器にお詳しいとは聞いているが、正直門外漢の筆者にとってはチンプンカンプンであり、この点については本学の福原康司准教授にお聞きいただきたい。

とりとめのない話になってしまったが、かかる先生が定年退職なさることは本学にとって大きな損失であることは疑いがない。これまでの学恩、ご教示に対して御礼を申し上げるとともに今後のご健勝をお祈りして擲筆する。

(2018年 1 月)